



Title	都市化にともなう Rurality の変性（Ⅱ）：その実証分析
Author(s)	金田, 弘夫; KANETA, Hiroo
Citation	北海道大学農経論叢, 27, 91-126
Issue Date	1971-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10871">https://hdl.handle.net/2115/10871</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	27_p91-126.pdf



# 都市化にともなう Rurality の変性 (Ⅱ)

—その実証分析—

金 田 弘 夫

## 目 次

Ⅰ 序——問題の整序と補足——	91
Ⅱ 実証分析	97
1. 札幌郡H町の特徴と都市化・産業化のメカニズム	97
2. 「連帯値」による Rurality の評価	104
3. 規範意識にあらわれた Rurality の変性	114
Ⅲ 結 論	123

## Ⅰ 序——問題の整序と補足——

前稿において、わたしは最近の都市化や産業化の衝撃によって、農村の「何がどう変わるか」という問題をめぐって、「変わるものは農村社会体系の基本的構成部分にみられる本質的な社会的特性である」とする仮説を展開し、その特性として Agrarity, Rurality 及び Locality という三つの特性概念を設定し、その理論的根拠とこれを実証するに必要とされる方法論的枠組について述べた。このような仮説をたてて実証を企だてたのは、少なくとも今日の如く農村がその外生的因子の作用によって激しく変動する場合、「社会の何が変動するか」という「変わるものの実体」について分析を施すことが、農村社会変動の理解の上からしても、また今後の地域社会の開発の上からしても極めて重要な基礎的考察であると思われるからである。

冒頭に掲げた命題は、このような前提課題を解くために、一応従来の農村社会学の諸原理のなかから誘導した作業仮説にほかならないが、本稿では、とくに農民の生活体系の面にあらわれる意識を中心にし、その要素と現象の包括的対応の特性としての Rurality に焦点を絞って、その実証的な分析を展開する。ただその前に、前稿において論じたところを顧りみて、いささか整序と補足を要することがらがあるので、先にこれらの点について述べる。

第一は、Rurality の概念とその取扱い方についてである。Rurality の概念内容については前稿において述べたが、その内容は必ずしす確定的なものとはいえず、いささか無限定で包括的なところがあった。それは農民の場合、生活そのものが生産と未分離であることにもよると思われるが、ここでは両者を区別し、生活とは一応農民が人として生きるための一切の社会的な営みの体系領域と規定し、その現象面に発現する行為と思维と感得の様式のもつある agrestic な性質あるいは rustic な特性一般をもって Rurality である規定する。ところで、このような特性は当然それを生み出す諸要素と行為者をとりまく社会の構造的機能的な特色と不可分の関連がある。したがって、Rurality は単に人の行為や思维や感得の 個別的特色 の一般的規定としてばかりでなく、社会の構造的並びに機能的側面からもとらえる必要が生ずる。ここに Rurality の分析をめぐる二つの焦点の複合的な関連がみられる。

この点、Rurality を経験的な立場からより普遍的恒常的な形相のもとに規定した P. Sorokin の都鄙社会の 8 つの複合的な規定をはじめ、鈴木栄太郎がその著「日本農村社会学原理」において展開された自然村の概念とその諸特性は Rurality 概念の理解をめぐる貴重なメルクマールになる。

ところが、ここで配慮を要することは、これらのものを素材とし、これに對して一層の抽象を施せば、そこにいわゆる「原型としての Rurality」のモデルを求めることが出来るが、しからばかくして設定された原型を基準にして、実際に都市化や産業化の衝撃をうけた農村の実態を照合させた場合、そこにあらわれた較差をもって、果してそれが都市化・産業化の作用の所産であるとする事が出来るかという方法論的な問題がある。

このような手法も、確かに一つの研究として興味に価するものがある。しかしながら、そもそも原型としての Rurality や農村は、可成り高度に晶華された抽象の所産であって、すべての現実の農村が過去においてこのよう

な原型(的なもの)から出発して今日に到っているとは限らない。ことに北海道の農村(とりわけ戦後開拓村=部落)の如きは「自然村」の如きものとは異なり、自然村的 Rurality などをはじめからもちあわせていなかったか、あるいは極めて稀薄であったといわねばならない。したがって、ここである原型としての Rurality を抽象的に設定し、これに現実の農村を照合させ、そこにあらわれた偏差をもって、これが都市化や産業化がもたらした変動作用の所産であるとする論理には実証的な分析の手法としてはいささか疑問が残る。

このような理由から、本稿においては、はじめから原型的な Rurality あるいは純粹の理想型としての農村像を概念的に設定することなく、現実にある個々の農村のもつ特性を表現型 (pheno-type) としてとらえ、さらにまた Rurality を形成的なものとみて、これを条件発生的な元型 (geno-type) との関連において考察する方法をとるべきものとする。このことは本稿の如く、都市化の影響によってそこに生ずる Rurality の変性を実証的に把握しようとする場合、一応注意を要することがらであって、むしろ原型との比較は変性してしまった Rurality の実態を解明したあとで別途に展開すべきであろう。ただ Rurality の変性が「可逆性」をもっている場合は、原型としての Rurality は一つの重要なメルクマールになると思われる。第二に、これらの観点からここで実証分析を展開するに当たり、差し当たり必要なことは靜態的な考察(クロス・セクショナルな比較)と動態的な考察(時系列的比較)の二つによる分析を展開することである。これら二つの視軸を併用することによって Rurality 変性の実体とそのメカニズムを理解することが出来ると思われるが、しかしながら本稿では差し当たりクロス・セクショナルな分析に集中せざるを得ない。それは時系列的な実証分析には資料に限界があり、自由度に乏しいため極めて困難であるからであって、これについては他の機会にその可能性と限界を可及的に拡張する手法を講じた後に展開せざるをえ

1) 「原型」と「元型」概念の差異について。ここでは、「原型」とはそれが具象化され差別を生じ現実の存在となるある観念的に追求された根源的なもの、あるいは模型と規定す。これに対して「元型」は、事態の特性を条件発生的な要素に還元しその要素の結合が作り出す特性の型と規定する。なお類似的用語としては、祖型、裸型、純型、本型、典型、標準型、母型、源型、基本型、素型、定型、全型、範型、正型、鋳型、基型、主型、公型、一般型等多数の概念の設定が可能と思われる。

ない。ところで第三に、かくの如く Rurality を「変わるもの」としてその変相の実体をとらえようとすると、次にその変容実相のメカニズムがどのような幅のものであるが、この点についてあらかじめ概念的に整序を施しておく必要がある。この点については前稿においても若干触れたところであるが、「変わるものの実体が Rurality」であるとする場合、この命題の中には、Rurality にはいろいろの「変りかた」があるという含みが内包されている。したがって、「変化のプロセス」と「変わる」という事象のもつ可能性の範疇とが確定されていなくては、変わるものの実体を見のがすおそれがある。そこでいまこれを抽象的な意味における Rurality 一般との関連において整理すると、次の如き変相の範疇が得られる。すなわち、

(1) 「残渣としての Rurality」—都市化や産業化の衝撃をうけた農村（都鄙連続体や都鄙接触体（Fringe）を含む）がなお部分的・局部的に残渣として Rurality を留保している場合、その Rurality。

(2) 「変性としての Rurality」—Rurality が変容・変倚・変質・退行・衰退・耐性化した状態（狭義の変性）。

(3) 「変換としての Rurality」—Rurality が都市的なものに代置・遷移・応化・溶解した状態。

(4) 「再生としての Rurality」—Rurality が新しい形態のもとに更新されたり、あるいは新しい方向にむかって転回・進化した状態。

(5) 「複合転換としての Rurality」—Rurality の副次的属性が上記のさまざまな変相の複合的な組合せによって変化した状態。

(6) その他—例え<sup>2)</sup>ば、Rurality が、それを形成するある側面における特性に退行があつたにもかかわらず他の側面におけるこれが進化によって生ずる補償的な「退行的進化」(regression)、あるいは社会の物質的基礎や外的環境が著るしく変化したにもかかわらずなお社会の既存の形態や組織(形質)を喪失することなくこれを安定的に保持しているホメオスタシス(homeostasis) 的状态、すなわちいわゆる「常態化としての Rurality」の如きものがあげられる。

---

2) 「その他」の変化として、「可逆」、「可塑」の如きものがあげられる。可塑性 Plasticity とは、物体の変態を考えた場合、固相から流動相に phase が変わるその中間の変り目の変態点をいうのであるが、この概念は集団特性にも準用出来る場合がある。

## 都市化にともなう Rurality の変性(Ⅱ)

以上は Rurality を一応不可逆的なものとみなした場合のその変相の枠組であるが、いずれにせよ Rurality をめぐる変相・転化のメカニズムは多岐にわたる。分析の結果、所与の農村のもつ Rurality が、これからの変化のメカニズムの中でどのように位置づけられ、またどのような意義をもつものとして規定されるかは後に明らかにするが、少くとも変化にはこのような幅が予定される。

第四に、Rurality の変性をとらえる 戦略的手段について 整序すべきことがある。この点についてはすでに前稿の「特性分析の方法論的枠組」において述べたが、ここで考慮を要することは、この研究において、戦略上の理由からその予備的考察の手段としてとりあげた、われわれの改訂による D.R. Fessler の Community Solidarity の観察法にどれだけ 応用的な利用価値が認められるかという点についてである。<sup>3)</sup>

前述の如く、この手法は E.T. Hiller が展開した命題<sup>4)</sup>「一次的農村共同社会は、それ自身の社会行動に対して、一連の価値観と共通の規範とをもった社会集団として機能している」という理論に立脚し、これより Fessler が誘導した「所与の共同社会における価値観や共通の行動規範に対して、その成員間に強い意見の集中があるときは、当該社会における成員の相互理解・相互合意の程度は高く、また連帯性も強いが、逆に意見にばらつきがある時は、その共同社会における統一性は弱く、社会的機能も劣り、したがって連帯性も低い」という仮説に基づき、これを満足させる8つの領域(エリア)よりなる40の尺度文章を基調として成りたっている。したがって、この前提においては、集団の成員がある共通の価値や規範を内在化する結果として、そこにこれらの内在的規範の統合的誘導による社会的連帯や凝集がもたらされるという原理が働いている。さらに、実際に展開されたの40の尺度文章の中には、地域集団社会の構造や機能にかかわるさまざまな要素をはじめ、かなり文化的な要素に対応した意識を個別的に把握できるという特性がみられる。それ故にこれらの個別的要素を基調として、地域集団社会相互の比較を

3) D.R. Fessler の「Community Solidarity」の観察法については、北海道大学農経論叢第18集拙稿「開拓農家の連帯性」昭和37年3月参照。

4) E.T. Hiller, "The Community as a Social Group," *American Sociological Review*, 1941, 6, 189-90.

展開すれば、連帯性とはまた別に構造・機能の面における Rurality の特性をある程度把握することが出来るわけであり、ここに一つ応用価値が認められる。

またこのような利点に加えて、各要素について発見された事実を吟味してその意味を統合すれば、それぞれの地域集団社会に内在するかもしくは共通する独自の規範体系を実験的に求めることが出来るという応用的価値がある。すなわち、40の尺度文章を対象農家に適用した場合、例えば都市化の影響を強くうけた農家の反応の仕方と、しからざるものの反応の仕方では当然相違が出て来るから、強く肯定的な反応をしめた尺度文章を集めてその意味を統一すれば、そこに都市化農村に特有な規範や価値観のパターンを形成することが出来るし、また在来型の農村についても同様にそれ独自のパターンを把握することが出来るはずである。このほか、われわれの尺度文章がかなり一般的な規範・価値内容をもっているとすれば、その表現を多少修正することによって、これを都市住民にも適用することが出来るわけであり、これによって都鄙間の比較が可能になり、さらに都市化の影響を受けた農村の特性をこの面から再吟味することによって Rurality の変性をよりコントラストに把握することが出来ることになる。これも、一つの利法とみられる。

以上の如く、本稿においては、前稿において提起した問題点とそれに対する展開の仕方について若干の修正と補足を施すことにした。これは一種のフィード・バックを意味するものであるが、いずれにせよ以下この前提に基づき Rurality の変性の諸相とその実体を追求することにする。

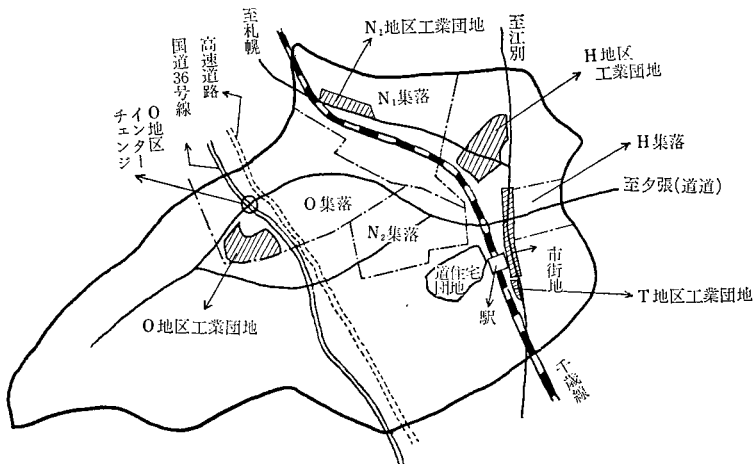
なお、この実証段階においては、前稿においてのべた如く、札幌郡H町の農村部の実態調査の結果を中心にして分析を展開するが、その後、幸いにして、T市(胆振)O社宅の三町内のサンプルを測定するのに成功したので、その結果を比較の素材とする。また、いまより15年前昭和30年に実施した亀田郡O町農村部における測定の資料が保存されているのでこれを引き出し、若干の修正を施して参考にすることにした。更にこのO町については昭和45年11月に再調査を実施し、この15年間に連帯性がどう変わったかを把握することにしたが、本稿ではその集計が間に合わなかったため、その結果についてはいずれ別の機会にあらためて発表することにしたい。

## Ⅱ 実証分析

### 1 札幌郡H町の特徴と都市化・産業化のメカニズム

実証分析の段階に入るにあたって、あらかじめ明らかにしておかねばならないことは、調査対象地点のもつ都市化ないしは産業化のメカニズムとその農村としての現在並びに往時の特色一般についてである。

このことを、明らかにするためには、都市化・産業化とは一体如何なることであり、これをどう把えるかという前提枠をあらかじめ設定しておかなければならない。しかし前稿でも触れた如く、ここでは都市化や産業化のプロセスそのものを考察の対象とするものではなく、所与の都市化や産業化の衝撃によって既存の Rurality がどう変わったかこの点に焦点を絞っているので、都市化や産業化の概念並びにそのメカニズムを把握するための枠組（標識）については、いままで多くの社会学者によって論じられてきたところに準拠して分析を進めることにする。



第1図 札幌郡H町略図

はじめに調査対象農村札幌郡H町について、その Demo-ecological な側面から概況を簡単に述べる。H町は調査時点(昭和44年6月現在)において、人口9,467人、戸数1,940戸を擁し、その面積は121.05 km<sup>2</sup> であって、

1 Km<sup>2</sup> の人口密度は 78.2 人であった。その位置は札幌市（昭和 45 年 11 月人口 100 万）の南東約 18 km のところに占められており、形状は南西部に狭く、北東部に広く、中央部に略々南北に向って国鉄千歳線と国道夕張線とが走っており、その中心点に H 町の市街地が展開されている。これより東側は平坦な水田地帯であり、また西側は台状の起伏のはげしい丘陵地帯であって、沢地帯には水田、丘陵部には畑作または酪農地帯が散在している。この地帯を北西から南東に向って斜めに走っているのが俗にいう弾丸道路（国道号 36 線）であって、その本町部分の略々中央部に「O 集落」がある。

開祖は古く明治 4 年にさかのぼるが、本格的な入植が行なわれたのは明治 17 年であって、本州広島県より一村開発の志をもつ 18 戸の団体移住が現在の「N 集落」に入植し、さらに同年末までに 25 戸 103 人が定着したことに端を発する。その後、H 町農村には各方面より年を追って入植するものが多くなり、現在までに多数の集落（部落）が形成されるところとなった。

現時点における各集落の経営形態別特色をみると、「水稻基幹」が 12 集落（内 6 集落は混作）、「そさい基幹」が 10 集落（内 5 集落は混作）、「酪農基幹」が 8 集落（内 6 集落は混作）となり合計 30 集落（内 17 集落は混作）を数えるにいたっている。

次に、農家戸数についてみると、昭和 44 年 6 月現在で、総農家戸数は 617 戸にのぼり、「農家率」は  $617 \text{ 戸} \div 1940 \text{ 戸} (\text{総戸数}) = 31.8\%$  となっている。このうち専業農家の数は 351 戸で 56.9% を占め、兼業農家戸数は 266 戸で 43.1% を占める。専業農家率が兼業農家率よりも高いということは、H 町がいまだに農村的色彩や性格を多分に残しているかの如く思われるが、しかしこれだけでは決定的なことはいえない。けだし北海道の農村が一般に専業農率が高いことを思えば（昭和 40 年度 60.1%、全国 20.8%）この程度では少なくとも純農村ということは出来ないからである。また、都市化のメルクマールの一つとし重要視される「農家率」であるが、全道では 15.7%（昭和 40 年度）であり、H 町が 31.8% である点からすれば、いかにも農村的であるが、しかし純農村というには農家率があまりにも低い。このほか、農家世帯人口にしても総人口 9,467 人中 3,514 人で 37.1% を占めるにとどまり、しかも毎年およそ 2% ずつ農家人口と農家戸数が減少している状況を合せて判ずれば、H 町はもはや「生粋の農村」とはいえな

都市化にともなう Rurality の変性(Ⅱ)

い。しからは以前はどうであったであろうか。いま、農地改革終了当時の昭和25年の状況を取りあげ、これを現在(昭和44年6月)と比較してみると、第1表の如くである。

第1表 H町の農家戸数・農家人口の推移 (昭和25年と現在の比較) (町要覧より作成)

年 度	(a) 総 人 口	(b) 農家人口	構 成 比 $\left(\frac{b}{a}\right)$	(c) 総 戸 数	(d) 農家戸数	構 成 比 $\left(\frac{d}{c}\right)$
昭 和 25 年	6,994人	5,268人	75.3%	1,179戸	837戸	71.0%
昭 和 ↓ 44 年	9,467人	3,514人	37.1%	1,940戸	617戸	31.8%
増 減 率	+35.4%	-33.3%	-38.2%	+64.5%	-26.3%	-39.2%

第1表においても極めて明白な如く、昭和25年当時の農家人口(世帯人口)及び農家戸数の構成比はいずれも70%をオーバーしており、生粋の農村というにさしさわりはなかった。それが約19年間に両者とも約半分の30%台に減少しているのが注目される。

ところがこれに対して、総人口・総戸数の方はいずれも逆に急激な増加をしめしており、19年間に人口は約2,500人(35%増)、戸数は約760戸(64.5%増)の増加をしめしている。総人口、総戸数がかくの如く急激に増加しているのに、逆に農家数・農家人口が激減したということは、H町の最近における変貌の一端を如実に物語るものであって、このことはそこに都市化や産業化の介在する余地と、これによるRuralityの変相の帰趨をうかがうにたる一つの有力な手掛りとなる。このような人口構成の動向についてはこれを以前よりもっと詳細に検討すべきであるが、ここでは省略する。この人口並びに戸数の増加は昭和40年に入ってから極めて急激となっており、昭和39年以降では年平均7.5%の増加率をしめしており、またこのような人口・戸数の伸びが隣接の札幌市の伸びと高い相関を保っている事実は注目に値することであって、ここにもまたH町の趨勢の一端がみられる。

Demo-ecologicalな特色としては、以上の如き人口のサイズや戸数の動態以外に、「人口移動」、「性比」(Sex Ratio)、「人口密度」、「世帯人員」、「世帯構成」(核家族・複合家族)、「年令別・産業別人口及び世帯数」等を指標にとって分析する必要がある。いまこのうち若干のものを拾ってその特色を簡単に述べると、次の如くである。

(1) 「人口移動」——人口移動は「転入」「転出」という社会動態の実数を把握することによってその特色を把握することが出来る。H町の場合、昭和 37 年までは転出者の方が転入者より多くいわゆる「出超」であった。ところがこれが昭和 38 年から逆転し、転入者数が転出者数を凌駕するようになった。ことに昭和 39 年からは転入者数は転出者数の 2 倍に増加し、昭和 41 年の如きは転入 2,354 人に対して、転出は 593 人という入超の形をとるにいたっている。また昭和 39 年からはそれまでになく女子の転入者が増加している。このように人口の入超的移動の形式をとるのは一般の農村には見られない特色であり、ここにもH町の都市化・産業化の趨勢を判ずる端緒が見られる。

(2) 「性比」(Sex Ratio)——女 100 に対する男の指数すなわち「男女比」については、昭和 25 年以降 43 年までの資料しかないが、昭和 25 年度で 101.0 であったものが昭和 43 年度には 105.3 となっており、現在では 110.0 近いものと推定される。Sex Ratio の高いこと、すなわち女より男が多いことは畑作や酪農地帯では普通のことであるが、稲作地帯では逆に低いのが普通であり、H町は稲作・畑作・そ菜、花卉・畜産・酪農などさまざまな経営形態が混在しているので、Sex Ratio だけでその Rurality の帰趨をうかがうことは出来ない。しかし、年を追って次第に Sex Ratio が高くなるという現象は、町内の産業化＝工業化の動向と符合するものがある。

(3) 「人口密度」——人口密度が Rurality と関係があることについてはすでに P.Sorokin の指摘したところである。H町の場合、前述の如く近年人口が激増しているのであるから、人口密度が高くなるのは当然である。すなわち昭和 25 年度で 56.5 人/1 km<sup>2</sup> であった人口密度が、昭和 40 年度では 66.0 人、昭和 44 年度では実に 76.9 人/1 km<sup>2</sup> となっている。もし、P.Sorokin の命題が正しいとすれば、人口密度が稠密になればそれだけ逆に Rurality は薄くなることになる。

また町内を地区別にみると、「市街地」を中心とする中心地区には、全人口の約 4 割が占められており、その密度は 222.0 人/1 km<sup>2</sup> (昭和 42 年 3 月末) となっている。これに対して、農村部の「N<sub>2</sub> 集落」近辺では 64.0 人、「O 集落」が 70.1 人、開拓地の「N<sub>3</sub> 集落」では 11.3 人となっている。したがって中心部は農村部が入っているにもかかわらず、都市的様相を顕著に示している。

## 都市化にともなう Rurality の変性(Ⅱ)

(4) 「世帯構成」——世帯構成は「一世帯当たりの平均人員」と家族形態の特色としての「核家族と複合家族の分布」に分けてみる事が出来る。

一世帯当たりの平均人員は昭和 25 年度では 5.9 人であったが、これが昭和 33 年に一たん増加して 6.3 人となったものの、昭和 44 年には再び 4.9 人に減少しており、都市型に接近しつつある。

核家族と複合家族の分布については累年統計はない。われわれが調査した標本農家群 78 戸の中では核家族 36 戸 (46.2%) 複合家族 42 戸 (53.8%) であり、昭和 40 年度の全国の「人口集中地区以外の地区」の核家族の率が 56.7%<sup>1)</sup>であったことからすれば、町のこの標本における核家族化の傾向はそれ程ではない。

(5) 「産業別人口及び世帯構成」——都市化・産業化の有力な指標の一つとして、この産業別人口及び世帯構成の変化をみることは社会的にも意味がある。

H 町の場合、昭和 24 年度の農業従事人口は総就業者数の 79.6% を占めていたが、これが昭和 40 年度には 54.0% に低下している。この約 15 年間に就業率の伸びた職種をみると、「サービス業」が筆頭にあげられる。すなわち、昭和 24 年にはわずか 2.1% であったものが昭和 40 年には 11.9% に伸びている。次は「卸小売業」で同年に 1.3% だったものが、10.9% に伸び、続いて、「建設業」が 3.2% から 8.4% に伸びているのが目立つ。この外にも「製造業」がかつての倍の伸び率をしめしており、逆に「林業」の如きは 1.7% から 1.2% に減少している。

このように一次産業の就業者率が激減してサービス業や卸小売業・建設業関係の就業者が増加したということは、H 町が晩近都市化や産業化の圏内に捲き込まれたことを如実に物語るものといわねばならない。さて、H 町をめぐる構造的特色とその変化はこれに尽きるものではない。すなわち、このほか「産業別組織別事業所数」・「土地利用形態」・「主要農作物の作付面積」・「生産年令人口率」・「業務人口率」・「財政」・「出生率死亡率」等を指標にとることによって、当該社会構成の特色と都市化・産業化の趨勢をうかがうことが出来る<sup>2)</sup>。しかし、紙幅の関係上これらの分析についてはここでは述べない。

さて、以上の考察を別としても、H 町が急速に発展する道央ベルト地帯に

---

1) 第 42 回日本社社会学大会上田正夫氏の報告資料による。

あるとともに、札幌経済圏と苫蘭経済圏の接点に立地していることからして、都市化・産業化の衝撃を受けやすい状況にあることは容易に理解出来る。したがっていまもし、このような趨勢を放任しておくとするれば、町内は著るしくスプロール化し、混乱と無秩序をまねく結果となる。そこで、このような客観的条件の変化との関連において、町当局は先に「道央地区新産都市建設基本計画」「札幌圏広域都市計画基本計画」との関連において、H町独自の「町総合開発計画」を策定し、その実現につとめることにし、H町の機能に次の如き方向性と枠組をあたえようと構想している。すなわち、

(1) 交通網・情報網のセンターとしての機能——具体的には現在の国道36号線に平行して「国土縦貫高速自動車道」・「北海道横断高速自道車道帯広線」の新設、これにともなうO地区のインター・チェンジの建設、その他数本の道

2) 都市化・産業化の標識の一つとして「地価」をとりあげることができる。北大農学部農村社会学専攻ゼミの学生（高島宏尚）の計算によると、H町の場合次のような「地価」の変動が判明したので、参考までに掲載する。

H 町 の 地 価 の 変 動

(昭和44年6月) 水田・畑・その他は反当=万円, 宅地は坪当=千円

集落名	種 類	10 年 前	5 年 前	現 在	倍 率		サンプル数 (戸)
					10年前比	5年前比	
N <sub>2</sub>	水田(反)	8.7 <small>万円</small>	13.1	20.5	2.4	1.6	16
	畑	7.1 <small>万円</small>	10.7	19.4	2.7	2.0	12
	宅地(坪)	0.5 <small>千円</small>	0.9	2.4	4.6	2.6	6
	そ の 他	12.5	17.5	30.0	2.4	1.7	4
N <sub>1</sub>	水 田	5.3	10.0	13.3	2.5	1.3	3
	畑	12.5	38.8	106.9	8.6	2.8	16
	宅地(坪)	1.0	9.1	21.6	21.6	2.4	10
	そ の 他	13.1	43.6	115.7	8.8	2.7	7
O	水 田	2.6	8.1	25.0	9.5	3.1	8
	畑	8.9	35.7	100.0	11.2	2.8	15
	宅地(坪)	1.4	2.8	5.9	4.1	2.1	4
	そ の 他	2.6	10.4	10.4	9.9	2.5	5

N<sub>2</sub>集落=純農村的, N<sub>1</sub>集落=都市化・産業化の影響を受けた集落, O集落=中間・過渡的。

これによると、N<sub>1</sub>集落の地価が如何にはげしく騰貴しているかが明らかであり、そこに都市化・産業化の一つの影響がみられる。

## 都市化にともなう Rurality の変性(Ⅱ)

道の建設・改修・拡張・延長。

(2) 軽工業地域としての機能——工業団地の造成と企業誘致（O工業団地・H工業団地・TO工業団地・N<sub>1</sub>工業団地の建設）。

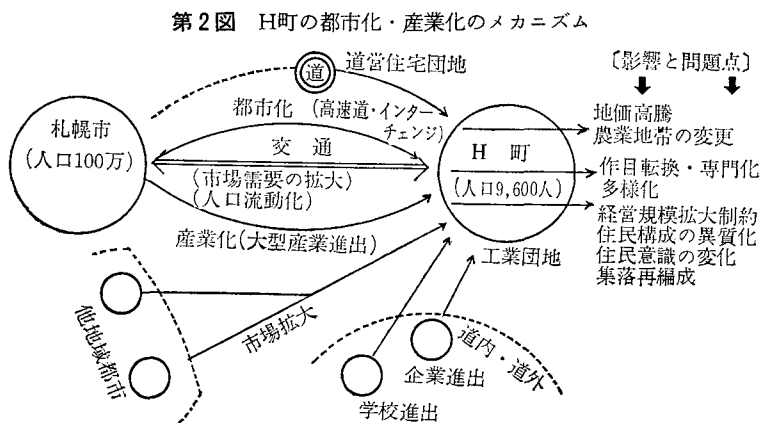
(3) 住宅基地としての機能——道営H町住宅団地を中央地区（駅の西側）に設定し、人口3万5千～5万を収容する札幌市のベット・タウンとする。

(4) 食糧基地としての機能——従来の水稲単作経営から脱脚して、都市近郊高収益農業を多様化の方式をとって展開する。

(5) 社会生活基盤の整備——「住みよい環境」の創造につとめる。

このようにして、いまやH町は往時の農村から大きく脱皮しようとしているが、都市化・産業化の波はすでにさまざまなる形をとっておしよせてきており、したがってH町は町総合開発計画とともにすでに独自の都市化・産業化のメカニズムをもつものといわねばならない。

いまそのメカニズムとその影響を図示して考察の素材とすると、第2図の如くである。



第2図においても明らかなる如く、H町をめぐる都市化・産業化のメカニズムはいまや顕在化しているといつてよい。その当然の結果として、これらの作用が住民の生活構造や生活様式・住民の社会意識あるいは農業の役割構造に大きな影響を及ぼすことはもはや疑うべくもないから、またそこからさまざまな社会経済的諸問題諸矛盾が派生することは十分予想される。

いまこれらの一連の問題点について、その具体的な現象形態を列挙する

と、次の如くである。すなわち、

(1) 企業進出・工場建設・宅地化・道路交通機関の建設等による「地価の高騰」と「土地利用のスプロール化」。

(2) 農産物の需要構造の変化と市場の拡大にともなう町農政の転換，農業計画・農業地帯・農民組織の変換，作目の転換，兼業化・併業化の促進。

(3) 他産業の進出による農耕地の分断・公害発生，これによる経営規模拡大の困難。

(4) 札幌市の伸展と道営住宅団地の建設による住民の異質化。

(5) 住民の町政に対する参加の消極化。

(6) その他（例えば、労働力の流出と質的低下）。

等が指摘される。

これらの問題の多くは、経済的要因から派生した矛盾とみられるが、いずれにせよ、このような問題及び矛盾とこれに対応した諸計画の遂行はH町がいままで久しく維持してきた農村としての社会的性格をひょう変させてゆくものとみられる。しかれば、H町の農村的性格はどのように変化し、またするであろうか、ここでわれわれは課題の本筋に戻らねばならない。

## 2 「連帯値」による Rurality の評価

前項で述べた如く、いまやH町の都市化・産業化のメカニズムは確定的であり、それを生み出した外的環境の厳しさには注目すべきものがある。しかし、そこに都市化や産業化の峻烈なメカニズムが顕在化しているということ、そのメカニズムを通していままであった農村の社会的特性就中 Rurality がどのように変化しているかということは一応区別して考察されなければならない。ここでは、後者に対する狙いを有効ならしめるために、H町において、上述の如き外在的な都市化・産業化のメカニズムの渦中にある集落と、しからざる集落を抽出し、それぞれの集落が現にもつ日常的な生活面にあける連帯意識を比較分析することによって、Rurality の解析に接近することにする。いま、そのための標本として選出した四つの集落について、その概況を簡単にのべると、次の如くである。

1. 「N<sub>1</sub>集落」——調査時点当時（昭和45年6月）における総戸数は272戸、農家戸数は23戸（内専業13戸兼業10戸）で、農家率はわずかに8.5%にすぎない。この部落は札幌市に最も近いところに位置し、道道夕張線が

## 都市化にともなう Rurality の変性(Ⅱ)

中央を横断し、これに沿って計画前に進出した企業の工場、住宅地、商店街が形成されその中に農家が混在している。往時は農林省直轄の原々種農場を中心とした純農村地帯であったが、現在では上述のような変容のほかに、リハビリ・センター、福寿園、養護施設等が設けられており、また「N<sub>1</sub>工業団地」(立地企業4社)が造成されている。農業経営形態は、畑作基幹であるが、そ菜、花卉・酪農・養豚等の専業もみられる。本研究においては、これらの農家群全体を対象として調査することにしたが、調査不能があり、結局23戸中19戸(81.5%)がその対象となった。なお「N<sub>1</sub>集落」の農家一戸当たりの平均経営面積は、5.1ha、その核家族率は63.1%、農家一世帯<sup>1)</sup>当たりの平均家族人員は5.1人、Sex Ratio=108.7、自家労働力指数一戸当たり26.5、居住年数最高75年、最低4年平均35.3年、世帯主の平均年令44.5才、部落の平均S.E.S<sup>2)</sup>は233.8スコアである。

2. 「O集落」——国道36号線(弾丸道路)をはさんで東南二地帯に分かれて展開しているのがこの集落である。その位置は札幌市の中心から20K圏内にあり、国道を利用して通勤可能な地域である。現在はインター・チェンジが建設中であり、ここに商店・農協出張所・住宅が集中して市街地化しつつある。また国道沿線には工場の進出が顕著であり、町としては「O地区工業団地」(立地企業9社)の建設を計画している。いまのところ人口の増加はそれほどの事はないが、将来を見越して、民間不動産業者が土地買収と住宅造成に奔走している。このような状況からして都市化・産業化の衝撃は次第に強くなるものとみられる。

調査時点におけるこの集落の戸数は「O集落(西)」が245戸内農家戸数52戸(農家率21.3%)、「O集落(東)」が55戸内農家戸数39戸(農家率70.9%)であって、経営形態はいままで畑作が基幹であったが、最近では「O集落(西)」では、そ菜基幹、「O集落(東)」では酪農基幹とする専業または混合形態のものが多くなってきている。本調査においてはこのうち「O集落(西)」の第一班のみを悉皆調査し、24戸の農家について資料を得た。

その一戸当たりの平均経営面積は5.6haであり、核家族率は25.0%(24戸核家族は6戸)、一戸当り平均家族人員は6.5人であって、「N<sub>1</sub>集落」よ

1) 「自家労働力指数」とは、成人男子(19才~55才)=10、成人女子=8、56才~65才まで=男6、女4、0才~15才=0、16才~18才=男女とも3。

りかなりサイズが大きい。また Sex Ratio は、135.8 と極めて高く、自家労働力指数は 1 戸当たり平均 24.3、居住年数は最高 80 年最低 5 年で平均 34.7 年、世帯主の平均年令は 52.2 才である。また部落の平均 S.E.S は 233.2 スコアであった。

3. 「N<sub>2</sub> 集落」——「N<sub>2</sub> 集落」が H 町発祥の地ともいべき由緒ある集落であることについては先にものべた。この地域は波状性の丘陵地帯で沢が多く、地域の 5 割以上は山林で占められている。しかし沢地帯に展開された稲作の歴史は古く、米も良質である。郷里 H 県の風習はほとんど稀薄になっているが、わずかに古い家屋の形態にその遺風がしのばれる。この地域には短大がある。また駅寄りの台地には道営住宅が建設されることになっているので近い将来に大きな変化が予測される。

現在この集落の総戸数は 31 戸（昭和 45 年 6 月）で内農家戸数は 23 戸、農家率は 74.2% と極めて高くしかも兼業農家はわずか 2 戸しかないので、この点からすれば純農村とみられる。経営形態はほとんどが水稻基幹である。本調査では 23 戸の農家のうち 19 戸について調査することが出来た（82.5%）。

一戸当たりの平均経営面積は 4.3 ha、核家族率は 42.1% とまず普通であり、世代が交替しているために古い部落のわりには大家族は少ない。また一大家族当たりの平均人員は 5.6 人、Sex Ratio はちょうど、100.0、自家労働力指数は平均一戸当たり 26.5、居住年数は最高 100 年、最低 6 年（分家のため）であって、平均 52.3 年である。また世帯主の平均年令は、51.6 才であり、集落の平均 S.E.S は 237.2 スコアであった。

4. 「H 集落」——「H 集落」は、本町の東側平坦地に位置し、中心市街地に近い水田地帯である。部落の歴史は新らしく戦後開拓部落で最近やっと安定しはじめたところである。隣りは N 町に接しており、地区の中央に道道夕張線が走っている。歴史の新しいところではあるが、立地的には都市化の影響は直接受けていないとみられる。しかし、後にも論ずる如く内部的には特異な性格がみられる。

総戸数は 25 戸、内農家戸数 23 戸で農家率は 92.0% と高く、しかもほとんど専業農家であり、この面からすれば純農村の性格が強いことになる。経営形態は前述の如く水稻単作であって、一戸当たり平均経営面積は 5.5 ha で

---

2) S.E.S とは Socio-economic Status Scale による各農家の取得スコア。

## 都市化にともなう Rurality の変性(II)

ある。本調査ではこのうち 18 戸 (78.2%) について調査した。

また、核家族率は 55.6% であって本調査の 4 つの標本部落の中では「N<sub>1</sub> 集落」に次いで高く、部落の若さを象徴している。一戸当たりの農家の家族人員は 5.7 人、Sex Ratio は 117.0 と割に高く、自家労働力指数の平均は 24.6、居住年数は最高 26 年最低 10 年平均 18.7 年であって、ここでもこの集落の生い立ちの若さが感じられる。また世帯主の平均年齢は 49.2 才であり、部落の S.E.S の平均値は 229.6 スコアである。

以上が、この研究において標本に選定された 4 部落の概況である。なお本調査においてはこの外「N<sub>3</sub> 集落」「H 市街」その他についても調査したが回収率がよくなかったので割愛することにした。

さて、以上四つの標本部落を素材とした場合、都市化や産業化の機能とメカニズムが、農家の部落内における意識の連帯性をどのように変え、またその Rurality にどのような影響をもたらしているか、以下、この点をクロス・セクショナルな手法を用いて解析してみる。この場合、前述の概況分析にしたがい、「N<sub>1</sub> 集落」と「O 集落(西)」を都市化・産業化の影響を受けた部落とみなし、これを「N<sub>2</sub> 集落」及び「H 集落」の如く、農家率の高い部落と比較するほか、なお都市的なものとして T 市 O 社宅の三町 (S 町・Y 町・O 町抽出率 1/10 計 61 戸) とも比較し、さらに 15 年前調査した 亀田郡 O 町の三部落合体の資料を参考に供することにする。

まず「連帯度」(C.S) について、その測定結果を一括して一表にまとめ、爾後の分析の素材とすると、第 2 表及び第 3 図の如くである。

これによれば、次のことが明らかである。すなわち、

(1) 都市化・産業化の影響を強く受けた農村部の集落では、これによって農民の価値観や生活意識に変化が生じ、従来あった集落内部における社会的意識の連帯性に分裂が生じ、その秩序と体系が著しく不安定になり、その統一性の欠除により、時によっては集落内部に社会的崩壊が生ずるおそれがあることが以下述べるが如き分析的事実によって明らかである。

(2) 都市化・産業化の衝撃を最も強く受けた部落の生活意識の連帯性をなお詳細に分析すると、意識の領域によっては、都市化の作用に対して極めて敏感に感応して都市的な形に変化する部分と、依然として農村的特色を残したまま極端に変わらないもの、さらに都市とも農村とも異なる特異な変容

第 2 表 H町農村部とT市町内の「連帯度」の比較

〔農村〕札幌郡H町

Max.=1.000

集落・町名 (戸数) 総スコア 調査年度	エリア特 連帯値	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	Ave.
		C.S	I.R	F.R	S.	R.	E.B	L.G	T.A	
N <sub>1</sub> 集落 (19戸) T=141.5 s. 44	平均スコア SD 連帯度	17.11 2.71 .344	17.95 3.79 .105	19.58 3.11 .297	18.58 2.30 .466	15.79 2.76 .304	16.05 3.38 .157	17.58 3.45 .176	18.90 3.13 .281	17.69 3.08 .266
O 集落 (22戸) T=150.3 s. 44	平均スコア SD 連帯度	18.82 2.72 .372	18.68 2.99 .308	18.59 2.90 .327	19.50 2.44 .446	16.82 2.59 .369	18.68 2.74 .367	18.73 3.79 .124	20.50 3.00 .338	18.79 2.90 .331
N <sub>2</sub> 集落 (19戸) T=160.9 s. 44	平均スコア SD 連帯度	19.37 1.87 .575	20.42 2.96 .345	20.95 3.24 .293	19.16 2.98 .320	18.68 2.56 .409	20.32 3.01 .332	21.00 2.43 .470	20.95 2.50 .453	20.11 2.69 .400
H 集落 (18戸) T=139.7 s. 44	平均スコア SD 連帯度	17.89 2.18 .484	17.56 2.91 .305	17.94 2.22 .475	16.94 2.30 .442	16.72 3.51 .142	17.28 3.28 .211	17.06 3.64 .118	18.28 3.65 .147	17.46 2.96 .291
同上 4集落合体 (78戸) T=148.3 s. 44	平均スコア SD 連帯度	18.32 2.56 .401	18.67 3.36 .223	19.26 3.11 .291	18.60 2.70 .374	17.00 3.04 .262	18.12 3.47 .184	18.62 3.70 .143	19.71 3.27 .263	18.54 3.15 .268

〔都市〕T市(抽出率 $\frac{1}{10}$ )

S 町 (10戸) T=134.8 s. 45	平均スコア SD 連帯度	16.80 2.57 .372	15.50 3.17 .195	18.20 1.23 .712	17.20 2.53 .390	15.00 1.49 .615	18.40 1.84 .572	15.40 2.43 .385	18.30 3.20 .252	16.85 2.31 .437
Y 町 (16戸) T=145.7 s. 45	平均スコア SD 連帯度	17.31 3.05 .267	17.50 2.78 .335	19.81 2.54 .430	17.56 3.39 .192	16.88 2.13 .483	18.32 3.44 .196	18.19 3.08 .277	20.13 2.03 .548	18.21 2.81 .341
O 町 (35戸) T=142.0 s. 45	平均スコア SD 連帯度	16.97 2.04 .506	17.49 2.61 .377	19.37 2.12 .519	17.46 1.75 .580	15.23 1.93 .494	18.34 2.24 .478	18.26 2.86 .330	18.97 1.89 .567	17.76 2.18 .481
同三町合体 (61戸) T=141.8 s. 45	平均スコア SD 連帯度	17.03 2.40 .418	17.16 2.80 .324	19.30 2.16 .509	17.44 2.34 .434	15.62 2.03 .485	18.34 2.51 .414	17.77 3.00 .288	19.16 2.23 .491	17.73 2.43 .420

〔旧農村〕渡島O町(昭30年当時)

旧 O 町 三集落合体 (80戸) T=134.2 s. 30	平均スコア SD 連帯度	17.56 2.84 .323	17.40 2.87 .313	16.58 3.08 .243	16.31 2.76 .316	15.53 2.66 .326	16.23 2.51 .377	15.91 3.32 .168	18.68 2.98 .311	16.78 2.88 .297
---	--------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

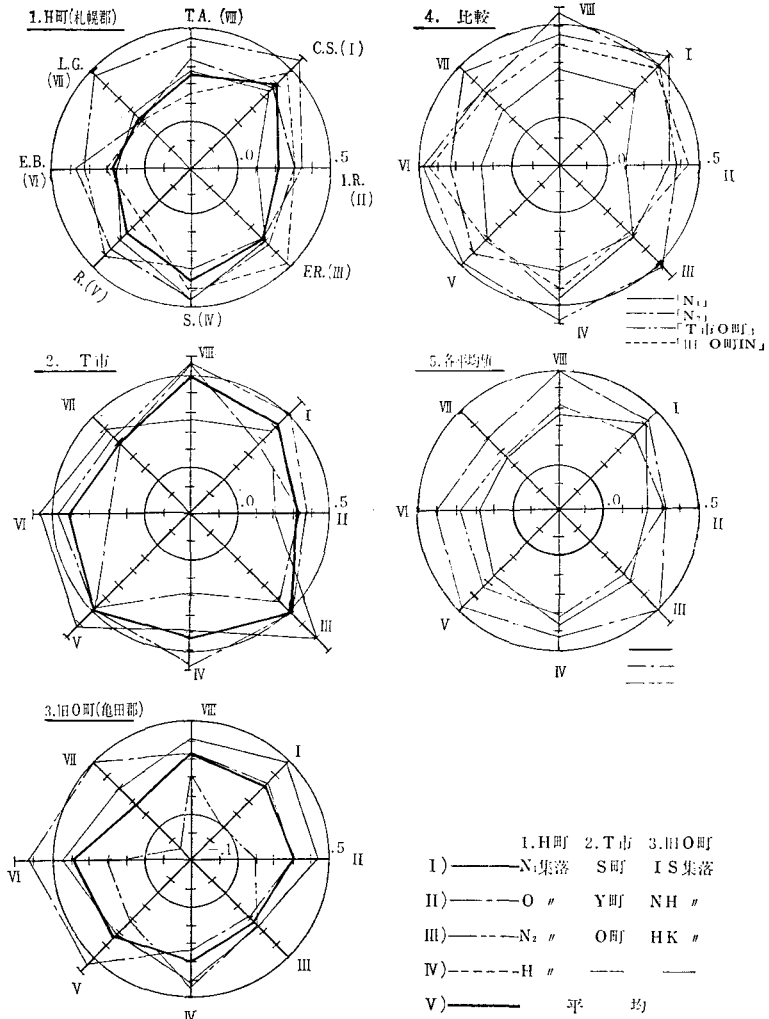
注 連帯度 =  $1 - \sqrt{\frac{S.D^2}{X}}$  H町, 旧O町→SD<sup>2</sup> =  $\frac{\sum(x-\bar{x})^2}{n}$ , T市→SD<sup>2</sup> =  $\frac{\sum(x-\bar{x})^2}{n-1}$   
 (旧)O町=「IS」「NG」「HK」集落の三集落合体, SD=シグマ・デスタンス

都市化にともなう Rurality の変性(II)

をしめすものが混在していることが明らかである。このことは、そこに都市化に対する「偏変性」と「差次感受性」の存在を物語るものであって、以下この点を分析事実によって説明すると次の如くである。

〔分析事実〕

連帯性の発現領域である8つのエリアにおける連帯値（平均スコア、シグ



第3図 農村と都市の領域別連帯度の比較（札幌郡H町、亀田郡旧O町—農村部、T市—都市部）昭和45年現在

マ・デスタンス=S.D, 連帯度) は、本道の既存の純農村の場合においては、比較的円満な形をとり、どのエリアにおいても行為に対する価値意識が規範に対して肯定的な方向性をとってあらわれ、比較的強いまとまりと、高い連帯度をしめすことが、いままでのわれわれの長年にわたる調査とその分析結果によって確認されている。そしてこのように規範に対して農家群が比較的鷹揚な対応をしめし、また意識の凝集性も極端に高くなったりあるいは極端に低くなったりしないところに安定した農村のもつ連帯性をめぐる Rurality の共通の特色が認められるのである。

ところが、都市化・産業化の渦中にある H 町の「N<sub>1</sub> 集落」では、8つのエリアにおける「連帯度」の絶対値の水準はバラバラであり、しかもとくにエリアⅡの「対人関係(I.R)」の連帯度は .105, 「経済行動(E.B)」では .157, 「地方自治」では .176 と極めて低位であって、総じて、これらのエリアにおける部落構成員(ここでは世帯主)相互間の「まとまり」と「連帯性」はなほだ“poor”であるといわざるをえない。また、エリアⅠの「部落の精神(C.S)」では、連帯度は .344 とやや高いが、しかしながら規範の肯定性はその平均スコアが物語る如く 17.11 (max. 25.00, mini. 5.00) であって、決して強い肯定性をしめすものとはいえない。

これに対して、H 町でも最も古くその発祥の地ともいわれる「N<sub>2</sub> 集落」の連帯度をみると、すべてのエリアにおいて高く、また“rich”であること、す

3) この八角形図表による連帯値は、円満な八角形をとりながら、外側にむかって大きくなるほど“rich”である。この図では、農村部の方が都市よりも偏倚が大きい。農村の「連帯度」について過去に測定した結果を参考までに掲げておく。過去の例では、可成り円満な反応がみられる。

農村における「連帯度」の測定結果

Max=1.000

町村名 (標本数)	調査 年 度	I 部落の 精神 (C.S.)	II 対人関 係 (I.R.)	III 家族の 責任感 (F.R.)	IV 文 教 (S.)	V 宗 教 (R.)	VI 経 済 行 動 (E.B.)	VII 地 方 自 治 (村政) (L.G.)	VIII 緊 張 関 係 (T.A.)	平 均 (A)
K I 村 (251戸)	S. 38	.477	.335	.285	.376	.405	.398	.288	.328	.368
H G 村 (36戸)	S. 38	.353	.489	.680	.443	.585	.360	.647	.383	.494
O T 町 (220戸)	S. 40	.424	.298	.321	.324	.386	.313	.201	.387	.330
N G 町 (232戸)	S. 42	.418	.242	.310	.391	.391	.318	.179	.280	.316
H 町 (78戸)	S. 44	.401	.223	.291	.374	.262	.184	.143	.263	.268

なわち「円満」で「豊かなこと」が指摘される。また各エリアの規範に対する肯定性も都市化の影響を受けた「N<sub>1</sub>集落」より遙かに高く、その平均値は20.11である。ことにエリアⅠのC.Sの領域におけるまともりは高く、その連帯度が.575と極めて高いのが注目される。また一般に農村では最近どこの部落でもエリアⅦの「地方自治(L.G)」の領域における連帯値が低く出るといふ共通の傾向が顕著にみられるが、純農村的な「N<sub>2</sub>集落」ではこのエリアにおける規範に対する肯定性は極めて高く、また連帯度も.470と高いのが目立つ。

このような比較から、純農村的な「N<sub>2</sub>集落」では生活意識の面にみられる農村的な連帯性はいまだに失なわれていないが、これに対し都市化・産業化の衝撃を強く受けた部落とくに「N<sub>1</sub>集落」では、このような形の Rurality はもはや期待出来ないことが明らかである。換言すれば、「N<sub>2</sub>集落」の例にみられるが如く、連帯性の保持が円満にして豊かな形をとるところに本来の Rurality の特色があるとすれば、「N<sub>1</sub>集落」ではもはやこのような Rural な特色は期待出来ず、部落内部の農村的な連帯感の崩壊の危機にひんしているといわねばならない。またもし R.M. MacIver のいうが如く、「人をして社会の成員たらしめ、また最後の手段として人びとが互いに社会を形成せしめるものこそこの連帯性(solidarity)にはかならない」とするならば、「N<sub>1</sub>集落」におけるこの連帯性の低位性は農村としての社会形成の最後の手段を喪失しつつあることを意味し、そこに農村としての social disorganization の兆候がみられることになる。しかしそれはいままであった農村としての内包的な連帯性の崩壊を意味するものであって、もしそこからあらたに外延的な連帯関係が形成される契機が認められるとすれば、「N<sub>1</sub>集落」には既存の Rurality の変性と、新しい Rurality の形成の過程を見守るべき余地が残されることになる。

「N<sub>1</sub>集落」の連帯性はかくの如く外生因子の作用によってかなり決定的な打撃を受けているけれども、都市部（ここではT市の例）の例と詳細な比較分析を施するならば、なお部分的に農村的な特性が残存しているともいえる。例えば、エリアⅣの「文教(S.)」の領域における連帯値をみると、その事実に対する規範的肯定性は都市と純農村とのちょうど中間位のところに位置している。また、「N<sub>1</sub>集落」が都市化・産業化の影響を強く受けたからといって、都市と同じ性格のものになっているとは限らない。例えば、エリアⅥの

「経済行動(E.B)」の領域では都市とは全く異った極めて低位な連帯値をしめしており、またエリアⅧの「緊張関係(T.A)」、Ⅲの「家族の責任感(F.R)」等においても、都市とも農村とも異なる特異な性格をしめている。

これらの分析的事実からして、都市化・産業化の衝撃によって、①意識の連帯性が容易に都市化してしまうエリアと、②容易に都市と同じタイプにならないエリアがあり、③また都鄙いづれのタイプにも属さない変化をしめすエリアとがあって、そこに三つの異った変容の領域とタイプのあることが明らかである。このような発見的事実から都市化・産業化の影響による Rurality の変相には、「偏在変性」の傾向があること、及び都市化・産業化に対する感受性に部分的な差があることからそこに「差次感受性」(differential susceptibility) の存在する余地のあることを指摘することが出来る。

次にH町の「O集落」と「H集落」の連帯性の特色について述べる。

「O集落」は前述の如く、立地的には都市化・産業化の要衝にある。しかし現段階においてはそのような景観的な特色にもかかわらず、生活意識の面における連帯性にはなお依然として農村的な風潮が多分に残っているとみられる。

これを前掲第2表の連帯値についてみると、エリアⅦの「地方自治(L.G)」の連帯度が.124であること、エリアⅤの「宗教(R.)」の領域における平均スコアが16.82と低いのを除けば、他のエリアではすべて安定したしかも比較的豊富な連帯値をしめしており、ちょうど「N<sub>1</sub>集落」と「N<sub>2</sub>集落」のほぼ中間にあたる特性をしめしているといえる。これは「O集落」が都市化や産業化の影響を受けながら、なおそれに順応した姿勢をとって新しい都市近郊農業(酪農)確立への志向を強く抱く農家が多く、また比較的によい指導者にも恵まれており、兼業や現金収入の機会があっても本業を投げ打つまでそれに走るようなビヘイビアを快よしとしない風潮のあらわれであって、ここに「O集落」の価値意識の特色が覗える。

これに対して、戦後開拓「H集落」は極めて特異な現象をしめしている。まず各エリアの行為に対する規範的肯定性は平均17.46と、本調査におけるH町の4つの標本部落では最低であり、この点は都市化部落である「N<sub>1</sub>集落」と似ている。また連帯度も八つのエリアの平均では.291であってそれほど高くはなく、これも「N<sub>1</sub>集落」に似ている。

しかし、部落的な人格的対人的「一体感」ともいうべきエリアⅠの「L.G」をはじめ、エリアⅡの「I.R」(対人関係)、エリアⅣの「S」(文教)、の三つのエリアでは、規範に対する低い肯定性のもとに成員の意識が凝集しており、これに加えてエリアⅢの「F.R」(家族の責任感)、エリア「R」(宗教関係)の各エリアにおける反応の仕方をみると、この部落は「N<sub>1</sub>集落」(都市化集落)と全く趣を異にしている。ことにエリアⅢの「家族の責任感」(F.R)のエリアでは開拓農村的な性格が可成り明瞭に残っているのは注目に値する。またエリアⅤの「R」(宗教関係)でも特異な反応の仕方を示めており、部落内部における宗教活動に対する一体感の欠除が目立つ。したがって、これらの諸特性からして「H集落」の連帯性の表現型は、「都市化型」とも生粋の「純農村型」とも異なり、やや「都市型」に近いという特異性がみられる。この特異性はむしろ開拓農村に通例であるが、ただエリアⅧの「緊張関係」(T.A)の連帯性が.147と低いのは、これまでのわれわれの経験ではほとんど例がなく、このことは平地農村地帯における開拓村の特色かも知れない。

さて都市化・産業化の影響を受けた農家群(部落)の Rurality の変容の特色に関する分析は、以上によって尽きるものとは思わないが、ここで都市部の連帯性の特色について触れておく必要がある。

本研究において素材に選択したT市O社宅の三つの町内は、それぞれ特色がある。すなわちT市の「S町」はブル・カラーの町内、「Y町」は上級職員の町内、「O町」は中級職のアパート団地である。本調査では各町とも10分の1の抽出率でとったため、標本数が少なく、あまり決定的なことはいえないが、しかし次の如き特質を指摘することが出来る。

(1) まず行為の規範的肯定性についてみると、都市部の(T市)のそれは、農村部(H町)のそれよりもかなり低いといえる。このことはこの尺度文章そのものが、やはり農村的性格の強いものであることを物語る一つの証拠となると思われる。またH町の純農村「集落」との比較からいえることは、この尺度文章は、安定的な生活体系をもつ集団に強く肯定的に反応する特性があるということができる。

(2) 都市部では、規範に対する肯定性は農村部より低いが、しかし、その相対的に低い水準で比較的意識がよくまとまっているという点においては、

農村部よりも連帯度が高くなって出るという傾向がみられる。ここに意識の連帯性の面における Urbanity と Rurality の表現型の違いが認められる。

(3) エリア別にみて、とくに都市部（T市3町）では、「C.S」「I.R」「S」「R」「L.G」の五つのエリアが、農村部に比べて、規範の肯定性が低いにもかかわらずその低い水準でよくまとまっているために意識の連帯度は高い。また「F.R」「E.B」「T.A」の三つのエリアでは、規範に対する行為の肯定性の水準がやや高く、しかも、意識にバラツキが少なくよりよくまとまっているために連帯度は農村部よりも可成り高くなって出ている。

かくの如く、都市部では人的関係を中心とした町内に対する帰属感、したがってまた町内のもつ人格的一体感（C.S 及び I.R）、は農村より低い水準において強く凝集しており、さらに「文教」に対してはやや批判的、「宗教」行動に対しては互いに無関心もしくは無干渉的であり、「地方自治」に対してはかなり低位の肯定水準のもとで互いに一致していることが明らかであり、ここから「都市的生活態度」（urbanism）の特性の一端を明瞭な形で視知することが出来る。

また、「F.R」「E.B」「T.A」の三つのエリアが上述の如き特性をもつということは如何にも都市らしい社会的風潮として肯首される。この点を少しく補足すると、「町内に対する家族の責任感」（F.R）——ここでは子供の行為が素材になっているが——は可成り高い規範的肯定水準のもとに意識が強く凝集している。「経済行動」（E.B）においても自主性が高く平等性を意識しているという点において強い一致があり、「緊張関係」についても無差別的な一体感が強くあらわれている。これらはいかにも都市らしい生活態度のあらわれといわざるをえない。

以上一連の分析によって、都市的な生活意識と農村のそれとの間には、規範に対する肯定性の上において注目に値する差が認められるばかりでなく、その連帯性においてもそれぞれかなり性質のちがった特性を発揮していることが明らかとなった。また同じ農村でも都市化・産業化の影響を強く受けた部落としからざる部落、あるいはまた戦後開拓的性格の強い部落とではこれまた可成り構造のちがった連帯意識をもっていることが明らかである。

### 3 規範意識にあらわれた Rurality の変性

この実証的研究において、その予備的考察として展開した連帯意識の測定

結果は、これを応用することによってそこからさまざまな実験的な結果を誘導する可能性をもっている。このことについてはすでに述べたところであるが、ここではその応用的利法をより具体的に展開することによって規範意識にみられる Rurality と Urbanity の考察に役立てようと思う。

第一に、考えられることは、ここで使用した多分に農村的性格の強い尺度文章に対して一種の因子分析を施すことによって、いわゆる、農村の連帯意識のパターンと都市的連帯意識のパターンを抽出することが出来るのではないかということである。第二に農家と都市住民に共通する指標として所得階層別あるいはこれと極めて高い相関をしめす Socio-Economic Status (S.E.S) による階層をとらえることによって、各階層ごとに階層内においてどのような連帯性の特色を求めることが出来るか、さらにこれを都市と農村及び都市化・産業化の影響を受けた農村部と比較することによって、そこにどのような連帯性の相違があらわれるか、この点を明らかにすることが出来る筈である。また第三に都市化・産業化の影響を強く受けた農村部における連帯性の欠除が主として何に起因しているか、その要因をこのような生活構造の内的分析を媒介にすることによって求めることが出来る。

このうち第一の課題は、結局連帯意識を通じて、この側面にあらわれる Rurality と Urbanity の模索することを意味し、第二、第三の課題は、かくして発見された Rurality が、都市化・産業化の衝撃によっていかなる様相のもとに崩壊あるいは変性しはじめるものであるか、この点を解明する手がかりとなる筈である。本章では、このうち第一の課題について若干の分析と考察を展開することにし、第二の階層内連帯性の都市と農村の比較考察及び第三の課題については紙幅の関係上別の機会に明らかにしたい。

農村型の規範意識のパターンと都市型のそれ及び都市化影響型のその特性を把握するためには、40の尺度文章をパラパラに分解し、各間に対する農村側と都市側及び都市化農村側の反応の強度をとらえ、これを配列して、その相違を分析する操作からはじめる必要がある。この外にも正規の因子分析の手法を用いることも出来るが、40間の相関マトリックスを作る場合、やはり反応の強度（肯定性）を一本にまとめる必要があるので、上記の処理は有意性があると思われる。

前述の如く、この調査では被調査者の尺度文章に対する 反応を 5・4・3・2・1

の強度であらわす方法をとる、5は「強く肯定」(vt), 1は「強く否定」(du) 3は「中間」(neutral) となっているから、3を支点にして5はプラスの2, 1はマイナスの2になるように分布に係数をかけて整頓すれば、各間に対する肯定値 (Vt) が求められる。いまこれを各集団について求める式を示めると、次の如くなる。すなわち、

$$Vt = \frac{(2vt+t) - (u+2du)}{2(vt+t+nd+u+du)} = \text{肯定値}$$

◎ 肯定値 Vt の範囲は  $+1 \geq Vt \geq -1$  である。

なお、vt = 「強く肯定」その度数分布…負荷係数 = 2

t = 「やや肯定」その度数分布…負荷係数 = 1

nd = 「わからない」その度数分布…負荷係数 = 0

u = 「否定」その度数分布…負荷係数 = 1

du = 「強く否定」その度数分布…負荷係数 = 2

Vt の Max. = 1.00 Mini. = -1.00

この「肯定値」を分析の単位にして、以下便宜上エリア別に農村と都市の連帯性をめぐる規範意識の特性の相違を列挙してみると次の如くである。

(1)「C.S」=Community Spirits のエリアを構成する五つの尺度文章は、前述の如く部落（または町内）内部における成員相互の人格的帰属感や loyalty（忠節感）をあらわす（あるいは求める）規範から成り立っているが、H町78戸の標本農家とT市O社宅の61戸の標本世帯（いずれも世帯主が調査対象）の規範に対する肯定値は、5問の総平均が、H町が.33であったのに対し、T市は.20となってあらわれ、そこに.13の差がみられた。

この差の意味は大きく、Community Spirits のエリアでは都市と農村との間に規範意識のパターンに大きな違いが認められる。すなわち、農村では都市にくらべ「地域小集団の構成員から自己の存在価値が認められているという自己意識」がより強い。都市の方はこのような自己承認を否定する傾向が強く、肯定値はマイナスになって出ている。ただし、農村でも戦後開拓の性格の強い「H集落」の如きはマイナスの性向を示している。とくに顕著な差のあるのは「部落(町内)のためにする協力奉仕」に対する評価と意識で、この規範に対する肯定値はH町が.48であるのに対し、T市は.29であって約.20の差がある。また、「青年の将来に対する部落員の配慮」にしても、農村の方は可成り配慮しているとする傾向が強く、その肯定値の都市部との差は

.14 であった。この外「仕事に対する部落員の熱意」にも有意な差がある。また注目すべきことは「自分の部落や町内が他人からどんな風にみられても平気か」という質問に対して、農村部ではやや「気にする」傾向があるのに対し、都市は反対に「気にしない」傾向が強く、また都市化の影響を受けた「N<sub>1</sub>集落」の如きは都市よりも強く気にしないという特性がみられ、ここにも差が認められる。

これらのことからして、C.S のエリアでは明瞭な形で農村的なパターンと都市的パターンが二分されること、したがってそこに Rurality と Urbanity を形成する規範的要素に有意な差のあることが認められる。

(2)「I.R.」=Interpersonal Relations, 対人関係のエリアついてみるに、都市と農村ではこれまた C.S 以上に大きな差がみられた。このエリアで両社会の差を最も大きくつけているものは、「部落または町内に腹を打ち割って話の出来る友だちを求めることが出来るか」という質問文章に内在する規範に対する肯定性であって、農村部では.35 であるのに対し、都市部は.00 であって、両者の間に極めて大きな差のあることが認められる。要するに、都市部では町内でも他人行儀的なところがあるのに対し、農村部では人格的結合の濃度が濃い訳であって、かつて P.Sorokin が指摘した如く、Rurality 形成の素因の一つがこの人格的結合にあるとする命題はここでも見事に実証される。ところが同じ農村部でも、都市化・産業化の影響を受けた部落 (N<sub>1</sub>集落)、あるいは歴史の新しい戦後開拓 (H集落) の如きになると、このような人格的結合に対する肯定値は半減あるいはそれ以下に低下する。また、都市部ではそれよりも遙かに低い肯定性をしめし、中にはマイナスの肯定値をもつ町内 (T市・S町) もある。

これと類似のパターンで、「部落 (または町内) が自己にあたえられる処遇についての意識」がある。要するに「大事にしてくれるか」ということに対する自己評価であるが、これも農村部と都市部とでは大きな差がみられた。すなわち前者は.44 の肯定値であったのに対し、後者はわずかに.16 であって、両者間に.28 の大差があった。

また「部落員町内員としての自負」の如きも農村部の方が都市部より肯定性が高く、「他人に対する批判」も、農村部の方が鷹揚で、都市の方がきびしい風潮のあることが明らかである。したがって農村では他人につらく当た

る」ようなことはあまりないが、都市ではややその傾向が強い。ただし都市でも T 市の O 町の如きはそのようなことはなく、可成り円満な形をとっている。これを要するに「対人関係」のエリアでは一般に農村では人格的にして円満なものを期待する傾向が強いが、しかし都市化・産業化の影響を受けた農村部では性格を異にしており、都市のそれに似た形になっており、ここでも Rurality の変性が認められる。

(3)「F.R.」=Family Responsibility toward the Community,「家族の部落(町内)に対する責任感」をしめすこのエリアは、子供の行動を素材にして、子供の行動について家族の世間に対する責任感をみようとするものである。ここでは「親の子供に対するしつけ」を内容としたものが 3 問と、「親の子供に対する配慮」2 問より分析したが、「三千世界の子をもつ親の心は皆一つ」という表現からも肯首される如く、一般的に言って子供に対する配慮には農村と都市との間に大きな差のある筈はない。この調査でも、規範に対する肯定値は 5 問の平均値で、農村標本では .43, 都市標本では .41 とほとんど同じ値になって出ている。各問に分解してもほとんど有意な差のあるものはみられなかった。ただ、家族員を年中行事に参加させる配慮の点では、農村ではさまざまな年中行事があるので、都市標本の場合よりも肯定値が高くなって出しており、純農村ほどそれが顕著であった。もとより、農村でも H 集落の如き戦後開拓、都市でも S 町の如き町内ではやや低い肯定性をしめしている。ことに S 町ではその低い肯定性のもとによく凝集しているために第 2 表にみられる如く連帯度だけは極めて高く出ている。( .712)。また「子供に対する監督」という点では都市標本の方が農村標本よりやや高い肯定性をしめしており、そこに .10 の差のあることが注目される。

したがって、この F.R. のエリアでも厳密に言えば子を思う親の心は皆一つであるけれども、農村と都市とではその表現型がやや異なるといえる。そしてその差異が生活様式のちがいからきていることは明らかである。

(4)「R.」=Religions「宗教関係」のエリアで最も注目すべき現象は、都市標本群では農村よりも一般に個人の信仰行動に対しては無関心な態度が強く、また個人の宗教的関心や行動に対してもその価値をあまり高く評価していない傾向がみられることである。例えば、宗教的規範の日常生活における実践に対する評価の意識についてみると、農村部でも必ずしも高い肯定性がみられ

るとは限らない。しかし都市標本にくらべれば、やはり農村部の方が可成り肯定性が高い。とくに純農村部の標本とくらべると、そこに相当大きなひらきが認められる。

このほか、宗教団体相互間の勢力関係についての意識、宗教団体の社会活動に対する価値評価等の点においても、一般に農村標本の方が都市のそれより円満にして好ましい評価を与えており、そこに有意な差があるものと思われる。都市部と農村部ではこのような差が明瞭にみられるが、しかしながら、都市化産業化の影響を受けた部落ではなお部分的に都市部よりはるかに低い肯定性をしめすものがあり、そこに特殊な変容がみられる。

(5)「S.」=Schools「文教・教育関係」のエリアでは、全体として農村部と都市部にあまり大きな差異は認められない。しかしなお詳細に検討すると「子供たちの進学への志向」については農村部の方が都市部より進学に対する志向がやや高く、また「学校の上級学校への進学指導」に対する評価も、農村部の方が「よくやっている」とする意識が強い。このほか「高校卒業生の部落や町内に対する関心」にしても農村部の方が都市よりも「関心がある」とみるものがやや多いようである。しかし、この関心も都市化の影響を受けた部落ではむしろこれを否定する傾向が強く、ここでも都市化農村部の特異性の一端がうかがえる。

(6)「E.B.」=Economic Behavior「経済行動」とよばれるこのエリアは、日常的な経済行動に対する価値規範がその前提になっている。この標本においては、都市部と農村部とは全体としてほとんど差は認められなかったが、しかしながら、部分的にみるとなおそこに可成り微妙な相違がみられる。

まず、「他人を利用する行動」、「一部に楽をして暮らすものの存在」の二つについては、いずれも農村の方が存在肯定的な意識が都市部より強くあらわれている。また農村部における「経営の合理化改善」に対応する都市部の「生活の合理化改善」の行動についての評価、並びに「兼業による現金収入への志向性」についてみると、どちらも農村部の方が都市部よりも高い肯定性がみられる。したがって、農村では経営合理化に対しては都市の生活改善よりもかなり意欲的であることが彼等の一般的な風潮として認められ、かつまた「現金収入への志向」も一般に肯定的な形でみられる。ところが都鄙間のこのような相違にもかかわらず、都市化・産業化の影響を受けた農村部で

は、「現金収入の兼業志向」はマイナスの肯定値 (.13) をしめしており、このような零細な収入を求めて行動するような意識はむしろ稀薄である。また「他人の利用」「楽な暮し」に対する存在意識も、自己の部落に該当者がいる関係からして、中間的な意識をもつものが多く、肯定値は二つとも .00 になっていることは注目を要する。そしてこの面においても、都市化・産業化の影響をうけた部落は、純農村とも都市とも全く異なった特異な意識を持っていることが明らかである。

(7)「L・G」=Local Government「地方自治」すなわち自治体行政に対する意識のエリアにおいては、自治の機能に役立つ真の指導者が部落または町内に存在するかという意識については、純農村部落と都市部の上級住宅町内では肯定的であるが、あとは肯定性が弱いあるいはむしろ否定的である。しかし、「町長・議員等の行動」については農村部の方が都市よりも良い評判をとっており、これは純農村になるほど高くなる傾向がある。「一部のボス支配」の存在についても、農村の方が否定的であるのに対し、都市部では、これを肯定する傾向をもった町内がみられる。この点、都市化・産業化の影響を受けた部落では、「真の指導者がいない」とする存在否定的なビヘイビアが強い。そして、この傾向はH集落の如き戦後開拓部落にもみられる。

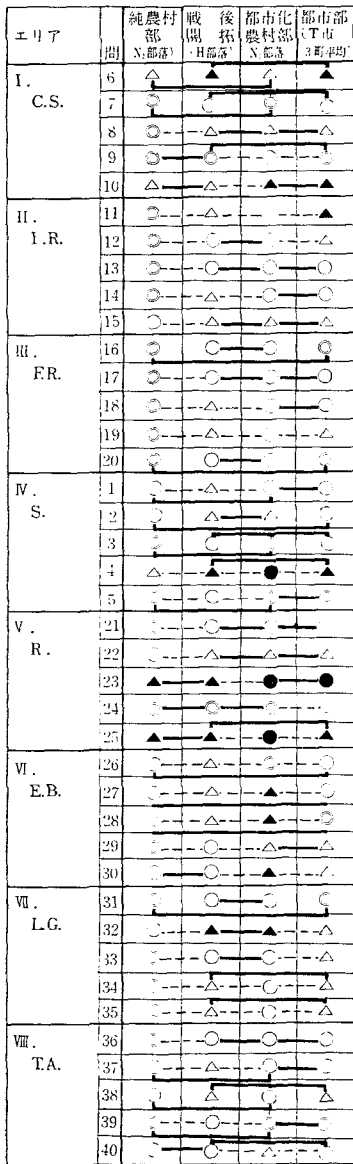
(8)「T・A」=Tension Area「緊張関係」のエリアにおいては、5つの尺度文章中、一つを除けば、都市部と農村部の町内または部落ではほとんど差はない。差のある点は、「男女関係・結婚問題について悩みをもつもの」の存在に対する意識で、常識的には農村の方が多いのではないかと思われるが、この標本群ではむしろ、都市部の方が多くなっている。いまこのポイントについてその肯定値をみると、農村が .41 であったのに対し、都市部はわずかに .07 であって、中にはマイナスの町内すらみられた。

その他の特色としては都市化の影響を受けた部落に多少仮設的「人種差別感」がみられる程度であって全体としては大きな特色はない。むしろこのエリアでは戦後開拓の標本部落にやや大きな偏差がみられるところに特色の一端が覗かれる。

以上、ここでは尺度文章を個別に分解し、便宜上エリアごとに各問について潜在する規範の肯定性を解析することによって、農村部と都市部の規範意識の相違をとらえ、さらに都市化・産業化の影響を受けた農村部の特色との

都市化にともなう Rurality の変性(II)

札幌郡H町(1969)

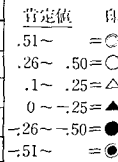


第4図 規範に対する肯定値の類似性の  
関連(H町)

比較を展開した。

その結果、これら三つのもの  
の間に極めて顕著な差をしめす  
要素と反面また共通的な要素の  
あることが明瞭となった。この  
ことからして、都市化・産業化  
の影響を強く受けた農村部にお  
ける農家の価値体系と純農村部  
における農家の価値体系とは可  
成り異ったものがあり、さらに  
またその体系は都市部のそれと  
も異った特異なものであること  
が明らかとなった。価値意識を  
めぐる要素と現象の対応性から  
くるこのような特異性は、もと  
よりこれを一義的に規定するこ  
とは出来ないが、都市化や産業  
化の衝撃を受けた農村部がいま  
までもっていた既存の農民的意  
識の様式を変容せしめた証拠と  
みてもほぼさしつかえないと思  
われる。

次掲第4図は、都市化・産業化  
の影響を受けた農村部(H町N<sub>1</sub>  
集落)が、ここで取扱ったの規  
範に対する各々の肯定値をもと  
にして、その肯定性の水準が都  
鄙のいずれの方向に近似の性質  
をもっているか、これを図表化  
したものである。この表ではま  
た純農村(H町N<sub>2</sub>集落)や戦



後開拓（H町H集落）のもつ規範意識と他地域集団のそれとの類似的関連性もわかるようになっているが、本表から次のような事実を認めることができる。すなわち、(1)ここで採択した連帯性の測定をめぐる 40 の尺度文章はその性質上ほぼ「農村的規範」とみられる。一〔証明〕純農村部では、各問に対する肯定値が強い肯定をあらわす○印（肯定値 .51 以上）によって覆われており、.26 以上の肯定値をしめす○印を合せると、40 問中 35（比重 0.875）がこれに該当している。しかもこれらの肯定値には他の地域集団と非平行的な独立特性をしめすものが多く、その比率は 40 問中 17 すなわち（比重 0.425）を占めている。よって、この尺度文章が純農村によく適合する特性をもっていることが明らかである。

(2)「都市化農村部」(H町N<sub>1</sub>集落)のもつ規範に対する肯定値は一般にその水準が低位である。40 項目の特性をみると、他地域集団と非平行的な独立の反応をしめた項目は 12 項目あって、その比重は (0.300) であり、また「都市部」(T市 3 町平均) と類似の特性をしめしている項目は 16 あってその比重は (0.400)、「純農村部」(N<sub>2</sub>集落) と類似の反応をしめた項目が 9 項目 (比重 0.225) あり、さらに「戦後開拓」(H集落) と類似の反応をしめた項目が 15 項目 (比重 0.375) ある。このような反応の特性からして、「都市化農村部」の規範意識は「都市型」タイプにかたよっており、「純農村」と類似の反応の仕方は極めて弱いことがわかる。また都市化農村部が戦後開拓と類似の反応の仕方を示めている点も注目に値する。このような分析的事実から、「都市化・産業化の影響を受けた農村部」はなかば都市型に近い反応意識をしめすが、しかし残りの半分の性質は純農村型に属するものでは決してなく、むしろ戦後開拓のそれに近いことが明らかである。純農村的な反応特性を比較的によく示めているエリアは「T.A」(緊張関係) だけであって、あとは「C.S」(部落の精神) と「S」(文教関係) にわずかに類似の反応がみられる。そして「I.R」(対人関係)、「F.R」(家族の責任感)、「E.B」(経済行動)「L.G」(地方自治) の 4 つのエリアでは純農村との類似の反応は全くみられない。

反対に、都市と比較的に類似性の強い反応をしめしているエリアは、「I.R」(対人関係)、「R」(宗教関係)「T.A」(緊張関係) の三つであり、「L.G」(地方自治)、「R」(宗教)、「F.R」(家族の責任感)、「I.R」(対人関係) の四つ

## 都市化にともなう Rurality の変性(Ⅱ)

のエリアではむしろ「戦後開拓」と類似の反応をしめす傾向がみられる。

このことからして、都市化農村部の規範意識は、近隣の純農村部のそれから比較して推定すれば、都市化・工業化の刺激によって、その規範に対する反応に偏在変性と差次感受性が存在する余地が十分認められ、これが意識面における Rurality 変性の一つの有力な証左として指摘されるのである。

(3)なお、ついでながら「戦後開拓」(H町H集落)の特性について一言すると、この部落は純農村とは可成り異なった反応をしめしており、都市型の反応意識に近似しているのが注目される。ことに「C.S.」、「R.」、「T.A.」ではこの傾向が強い。しかし、「E.B.」、「F.R.」のエリアでは必ずしも都市型とはいえず、前者は独自の反応型をしめし、後者は「都市化農村部」のそれに近い<sup>1)</sup>反応特性をしめしている。ここにH集落の特異性がみられる。

以上の分析から、純農村と都市化農村部そして都市部と開拓農村では、それぞれ異った規範体系をもつものとみられ勝であるが、しかし、このことはその相互間に共通の規範的要素が全く存在しないということを意味するものでは決してない。所与の規範に対するある倫理的水準からなされる共通の承認は期待出来る。ただこのような高次の規範的要素に対応する日常的な行為と思惟と感得がもたらす意識の反応の仕方にちがいがあり、それが上述の如き表現型となってあらわれるものといわねばならない。したがって、ここで各地域社会集団の特性に合った規範体系をたとえ実験的とはいえ無理に作文することは意味がないし、またこのような実験を展開するには、より大量の標本を求めてから後にすべきものと思われる。

## Ⅲ 結 論

本稿で展開した都市化・産業化にともなう Rurality の変性の実証的研究は、その予備的考察としてまたその戦略的意図から、さし当たり Community Solidarity の概念とその測定法を応用的に活用することによって得られた事

---

1) 「戦後開拓集落」の特性との関連において注意を要することは、一般に農村はその社会的特性の一つとして等質的であるといわれ、その根柢を農業という職業に帰一するものとする理解が多いが——例えば、池田善長「農村社会学における基礎的諸問題に就いて」北大法経会論叢第3輯昭和9年1月68頁参照——しかし、H町のこの開拓集落の如きはすべてが農家であるにも拘らず、各意識の領域の内容は可成り多様であって、決して等質的とはいえない。

実発見的要素の分析とその解釈（理解）に終始する結果となった。

ここでは Rurality をかつて P.Sorokin が展開したような八つの複合的な標識、あるいは最近の諸学者が展開した都市化理論から若干の距離においてこれを都市化・産業化のメカニズムを通じて必然的にもたらされる所与の地域社会集団の意識の変容として把えようとする意図が先行している。そしてこの地域小集団のもつ意識を観察可能なものにするため農村地域の社会集団に共通すると見做される一連の農村的な規範や価値を前提にし、これに対する成員の行為と思惟と感得がもたらす反応の結果を解析する手法を展開し、これを、現実の純農村部、都市化農村部、都市並びに戦後開拓農村部についてクロス・セクショナルな手法を用いて比較分析することにした。もとより意識をもって Rurality の相対的特性の一つとみた場合、可視性をもった意識の特色はその極く一部の属性にすぎない。したがって、これを以ってすべてを律することは出来ないし、また意識が Rurality のすべての表現的形態ともいえない。しかも、この分析においては、はじめから原型としての Rurality との対照をさけ、これを他地域集団との対比において考察しようとしたから、当然時系列的な分析が欠除するところとなった（これについての考察は別の機会にゆづらざるを得ない）。

これらの理由から、本研究はいまだ中間発表的な境を脱しないものがあり、また分析の結果についても極めて限定された条件と範囲のもとに一般化出来るにすぎない。このような制約はあるが、しかしそれにもかかわらず、本研究においては以下要約するが如き若干の注目すべき社会的事実を発見することが出来たと思われる。すなわち、

(1) 調査対象農村、札幌郡H町をとりまく都市化・産業化のメカニズム及び最近における農村としての Demo-ecological, Demo-occupational な概況把握。

(2) 調査対象農村、札幌郡H町に内在する都市化・産業化をめぐる問題点、これに対応する町開発計画機能の実体。

(3) 標本集落の現況とその農村的性格の概要。

(4) 「連帯値」によるH町の純農村部・都市化された農村部・戦後開拓農村部及び近隣T都市O社宅・3町標本群の比較分析。

そして、その結果判明したことは次の8点である。

a. 「都市化農村集落」では集落内部における社会意識の連帯性に分裂

## 都市化にともなう Rurality の変性(Ⅱ)

が生じている疑いがみられる。

b. 意識の領域によっては、都市的な形に敏感に変性したとみられるものと、なお農村的な残渣を留める部分とがあり、そこに「偏在変性」と「差次感受性」の存在する余地が認められる。

c. 「純農村的集落」では円満にして豊かな連帯性が全領域にわたってみられる。このことは過去においてわれわれが調査した他町村の純農村部の特性と一致符合する。

d. 「戦後開拓集落」の連帯性は純農村とも都市化型の農村部とも異なったやや都市型に近い特異性をしめしている。

e. 「都市(T市)」の連帯性は規範に対する肯定性が低いが、低い水準でよく凝集しているために一般に「連帯度」は高くなって出ている。ただし標本数が少ないので一般化は保留する。

f. 尺度規範に対する「肯定値」を算出して比較検討したところ、都市化・産業化の影響を受けた農村部の集落(H町 N<sub>1</sub>集落)では、「C.S」, 「I.R」, 「E.B」, 「L.G」の各エリアにおいてその値が低く、都市並びに純農村部との間に有意な差が認められた。

g. 規範に対する肯定値の他地域集団との類似性の関連を調べたところ、都市化・産業化の影響を受けた農村部の反応は一般にどのエリアでも肯定値が低く、都市型は近似しているが、反面「戦後開拓」との間にも高い類似的関連性をしめしていることが明らかになった。しかし、「T.A」, 「C.S」, 「S」の三つのエリアではわずかではあるが純農村的な特色が残存している。

h. 以上の分析を総合して、規範意識の面にあらわれた Rurality には、都市化・産業化の影響を受けた農村集落においてはそこにある種の変性が生じていると結論せざるを得ない。そして、規範に対する肯定値の他地域社会における類似的反応を通じてみても、そこに一種の偏在変性・差次感受性の存在することがこの面からも容認される。

しかし、これら一連の Rurality の形質変換や変相が、確定的なものであるかどうかについてはなお多くの標本について検討することを要する。

以上、ここでは、主に札幌郡H町農村部において都市化・産業化の影響を受けて農村集落の Rurality の変性を連帯性と規範意識を分析の素材にして

検討した。これによって発見された事実は、あくまでも予備的考察の所産である。したがって、この Rurality の変性が如何なる要因によって生じたものであり、また如何なる方向性をもっているか、さらに変容する農村社会の生活構造とどのような関連があり、また変りつつある規範体系そのものが当該社会において如何なる機能を果し、あるいはまたそれが地域社会集団の構造あるいは住民の地位と役割の構造に如何なる影響をもたらしているか、これら一連の問題についての考察は未処理である。また規範意識の変容にともなう他の農村集落の構成員とのさまざまな役割の葛藤等の問題についても分析を施さなくてはならない。

これらのことに加えて Rurality が生活構造と密接な関連を有する点からして、少くともわれわれは次の段階において、本稿において把えた連帯意識とその基調にある規範の変容の特質を、農民生活構造の側面から把える考察が必須と思われる。私は差し当たり、この問題を「生活階層」の側面から接近しようと思うが、その展開は本稿とは別にいずれ機会を改めて明らかにすることにしたい。

(1970. 12. 20)

(なお、本研究は「昭和 45 年度文部省科学研究費補助金交付一般研究課題」である)

# THE DEGENERATION OF "RURALITY" UNDER THE URBANIZATION (II)

— Its Verities and Analyses in Rural H. Town, Hokkaido —

By

Hiroo Kaneta

The aim of this paper is to verify the degeneration of rurality by the shocks of the urbanization and industrialization under the present situations. In order to attain this studying purpose, we coordinated the methodological frame works and the stratages of research, and then analysed the facts-finding by our research.

As mentioned the former paper (Part I), we have used the Community Solidarity Method mainly as a tool of analysis for the degeneration of rurality. And we have had the comparative method to find the differences of characteristics between the urbanized rural area and the pure rural area and also the city area.

The sample areas to compare were rural H. Town near City Sapporo, which composed urbanized rural part (village) and pure rural part and also newly settled farm village after the War, and City T. The total numbers of reseached farmers were 78. and the total sampling numbers of reseached citizen were 61.

The results of this study were as follows.

- (1) In the urbanized part of Rural Area, we could find the tendency of the dis-organization of solidarity or social dis-identification in the consciences as a sub-village (Buraku).
- (2) We had 8 areas about the common norms and values as the general way of life, but some of those areas were very sensible by the shocks of the urbanization and industrialization, and other areas remained yet having the former rurality. Especially, the degrees or levels of solidarity in the areas of the Community Spirits, Interpersonal Relations, Relegion, Economic Behavior and Local Government were poor and low.
- (3) In the pure rural part of the area, we could find the rich degree of solidarity about all of the areas of the conscience.
- (4) But in the city part, in spit of the low level of possitive agreement for the common norms and general values, we could been seen that the strength of consensus was very strong at the low level.

- (5) Finally, the degree of the affirmation for the common norms and general values had different traits between urbanized area of rural part and other parts of rural area and also city area.

Putting together various analyses in this study, the rurality of urbanized part of rural area which we could found through the solidarity tests have been changing and degenerating to the new one without doubt. But the rurality is connected with other social facts, especially the life-living structures and functions, therefore we have to study on the theories of the systems of living and facts of living in the urbanized rural areas by the cross-sectional method and time-series comparisons. By those analyses, the degeneration of rurality will be more clear than the present studies on this paper. It is our next problem to be continued.